温泉地の特種気體に就て（那須湯本溫泉）

薬学雑誌 490 号 1922 年 1067 頁

硫化水素が世間を騒がす中，標題の論文が目に付いた．昔の薬学は守備範囲が広い．

有名な温泉地である那須湯本温泉（栃木県）に，今では史跡に指定されている「殺生石」と呼ばれる巨岩がある．この岩の周囲は火山ガスが滞留し，過去に多くの人や動物が犠牲になった．那須で退治された妖怪狐の怨念が毒石となったという伝説から「殺生石」の名が付いたという．本論文は，大正 11 年に東京衛生試験所の四方敬一理学士が，この付近の毒性ガスの分析結果を報告したものである．

「野州那須溫泉は那須火山の周辺に散在する所謂那須十湯の一にして湯元と称し，人口五百，戸数百，海を抜く三千尺，東北本線黒磯駅より西四里九町にありて十湯中尤も山麓に位す．東北に那須嶽の雄姿を仰ぎ西南遠く開け眺望開豁（かいかつ）なり．」という格調高い書き出しで始まる．学術論文なので質量，容量は当然グラム，リットル単位であるが，長さの単位が町，尺なのが面白い．「鹿之湯（注：温泉の源泉地）を去ること数丁，暗紫色の山腹あり．繞（めぐ）らすに木柵を以ってし，柵内一帯を殺生石と俗称し，古来人畜を斃すを以って有名にして，余等の試験中も（大正十年十一月二十六日夕）一青年の為めに死せるを目撃せり．」まさに命がけの調査である．

分析の内容は長いので省略するが，採取した気体からは硫化水素と炭酸ガスを検出したのみであった．「殺生石にありては何人もよく燐に似たる葱臭を僅かに感知するを得るを以て砒化水素（AsH_3）其他の水化物の試験を試行するの必要を知り…」と他成分の検出も試みたが，当時の分析法では「葱臭」の原因は判明しなかった．「故に致死の原因は寧ろ硫化水素及び炭酸にありとするを妥当とせざるべからず．」という結論でまとめている．硫化水素の強い毒性を侮ってはならない．

なお縦書きの薬学雑誌は，この 490 号が最後である．次の 491 号（1923 年）からは，現在の薬学雑誌，ファルマシアと同様の横書きになった．

長谷川雅司